

国産漆の歴史と現状

—備中漆を中心に—

宮 崎 百 合

Yuri Miyazaki : The History and Present Situation of Japanese Lacquer

—Focusing on Bittchu Lacquer—

I. は じ め に

漆は、古来よりアジアの各地で利用されてきた天然樹脂である。

塗料として、あるいは接着剤として、この樹脂は生活の中で活躍してきた。中でも日本産のそれは、外国産にない深いつやと品質のよさを併せ持つ。

現在の岡山県川上郡備中町は、昔から良質の漆産地として知られてきた。ところが、戦後の近代工業の波にのまれ、他地域の産地同様急速に廃れてしまう。

現在、復興に向けて活動が行われているが、漆産地を取り巻く状況は非常に厳しい。

英語で漆を意味する言葉はJapanであるのに、この現状はどうしたことであろうか。

筆者も作品の制作者として漆に関わっているが、国産漆の現状を見るにつけ、無関心ではいられない思いを強くするようになった。

ところで、今まで漆といえば工芸作品や作家ばかりに焦点が当てられ、素材そのものである漆とそれを搔く職人に関しては、あまり表立って語られる事が無かった。

そこで今回は、備中漆を中心としながら日本の漆

の歴史を概観し、国産漆の現状と今後の課題について考えていきたい。

II. 日本の漆の歴史

1. 古代から近世

1977～78年に中国浙江省の河姆渡遺跡^{かぼと}で7,000年前の漆塗りの碗が出土したことから、漆文化は中国南西部あたりを発祥とし、それが日本に伝わったという説が有力であった^(註1)。

しかし1975年以降福井県三方郡三方町の鳥浜遺跡において漆製品が出土し、約6,500年前の縄文時代前期にはすでに朱と黒の漆を使い分けるという高度な技術を持っていたことが判明した^(註1)。縄文時代の漆製品の出土は東日本に集中しているが、2,000年(平成12)1月には松江市手角町の^{それて}夫手遺跡から精製された漆が付着した土器が発見され、6,800年前のものと判定された^(註3)。また、漆液から塗料を作るためには専用の道具が必要であるが、縄文時代後期には貯蔵用の壺や漉し布が、7世紀後半には加えて刷毛や篋も出土している。これらの事例から、確かに大陸からの影響があったにせよ、それ以前に日本独自の漆文化が形成されていたのではないかとの見方が強まっている^(註4)。いずれにせよ世界の漆

文化発祥の地は定かではなく、なお慎重な論議が必要とされている。

ところで、漆というと接着剤としての用途も見逃すことができない。すでに縄文時代には欠けた器を修復するために漆を用いていたようである。

現在でも、陶器の欠けをつぐのに漆が使用されているが、古代にこのような技術が確立していたことには驚きを感じる。しかし木から滴る樹液が次第に粘りだし、やがて硬く固まる様を見ていると、むしろ塗料としてより接着剤の目的で使うという発想が先ではないかとも思われる。

飛鳥時代に入って中央集権が確立するころには、漆はすでに植林栽培され、為政者の管理下に置かれていた。木肌から採れる漆液と実から採れる木蠟のおかげで、大切な木として扱われたからである^(注5)。

採取された漆は税として納められ、上流社会の身の回りを飾った。

陶磁器や木工が材料の生産地のもとで発展したのに対し、漆は城下町など為政者の管理下の土地に植林され、そのなかで発展していったといえる。

これが後世、為政者の没落に伴いパトロンを失った漆産業が衰退していく一つの原因でもあった。

●漆掻きの誕生

漆が産業化するのに伴い、専門の職人集団が誕生し、各地の漆山で漆を掻くようになる。江戸時代までの漆掻きには大きく2つの系統があり、吉野漆（本拠地：奈良県吉野地方）は西日本、越前漆（本拠地：福井県武生地方）は東日本に、それぞれ出稼ぎに出ていた。

やがて彼らの技術が次第に地元で伝承されるようになったため、現代にいたるまで漆掻きにおける技法や道具などに大きな地域差は無いようである^(注6)。

●備中漆の誕生

備中地方は現地の豪族によって開発され、平安時代後期に皇室の領地となった。927年（延長5）に編纂された「延喜式」には漆を税として収めた記録がある。その後鎌倉時代後期に教王護国寺（東寺）に寄進され、以後荘園の歴史の終わる戦国時代まで

その支配は続き、漆をはじめとする産物が東寺に納められていた。

近世において生産の中心となっていたのは現在の岡山県川上郡備中町であり、江戸時代初期には産地として確立したようである^(注7)。

2. 幕末から戦後

●中国漆の輸入と国産漆の保護

こうして日本各地で漆産業が定着し、浄法寺漆、越中漆、吉野漆など大規模なところでは安定した量の漆を産出していたが、江戸時代末期に中国からの輸入が始まると、次第に押され気味になっていく。開国によって貿易が盛んになると輸入量はさらに増し、明治30年には外国産が390t、国産259tと逆転してしまう。

そこで事態を重く見た産地が国産漆の保護運動を起こし、1906年（明治39）、漆樹栽培奨励案の請願を国会に提出し、翌年には特殊樹種奨励金交付制度が山林局長から発せられる。これを受けて、1908年（明治41）から1916（大正5）の間、国庫の補助で21万本あまりの漆苗木が無償交付された。

1914年（大正3）に第一次大戦がはじまると、紡績などの軽工業や鉄鋼などの重工業が盛んになってくる。この頃には漆が科学的にも研究されるようになり、漆器のみならず紡績用の木管や型紙、自動車や船舶、傘、釣具などの塗装や接着など、工業の分野においてよく利用されるようになった。

1925年（大正14）、国産漆奨励会が創設され、漆苗の無償交付、漆液の採取試験などを行い、政府に対しても請願運動を行った。その結果、1928年（昭和3）頃より、政府は補助金を交付し、漆組合の設立と漆樹の植林を奨励する。しかし、1927年（昭和2）の金融恐慌、続く1929年（昭和4）の大恐慌の波は漆業界にも押し寄せ、漆の価格も暴落した。

昭和初期まで、漆掻きは土地の所有者に漆の木を提供してもらい、掻いた漆を代価として支払っていたが、1937年（昭和12）には、全国で1,012件の漆組合が作られ、協同販売を行うようになり、次第に

この制度は廃れていく。

組合は植林にも意欲的に取り組み、30を越す県において合計6,105,113本の漆樹が植栽された。

ところが、その後の満州事変に続く戦争拡大のために補助金が中断し、植栽地の管理不十分もあって成果が見られることは無かった^(注8)。

●戦中・戦後の様子

戦争が始まって中国からの輸入が途絶えると、漆は軍需資材として高値がついた。しかし産地で採取した漆はほとんどが供出のかたちで出荷せねばならず、人手不足も手伝って漆掻きの生活は苦しかったようである。

軍需景気で一時期上昇した価格も、終戦後中国からの輸入再開によって下落するが、1958年(昭和33)長崎国旗事件により中国との貿易が2年半途絶え、漆の価格は再び急騰した^(注9)。

●工業化の波

戦後、他のいわゆる工芸品；染織や陶磁器が工業を取り入れ、大量生産による大衆化を目指した中で、漆は手作業のスタイルのまま茶道具や高級家具といった特殊な分野をターゲットにしたため、次第に産業として孤立した存在となっていった。

合成樹脂を取り入れて工業化への転換を図った産地もあるが、多くは安価なプラスチック製品に押され、次第に姿を消していくこととなる。産地の衰退に伴い、漆掻き職人の数も昭和30年頃をピークとして急激に減少していく。

●備中漆の衰退

中国山地は江戸時代中期から1955年(昭和30)頃まで漆掻きが盛んに行われ、遠く丹波や吉野、越前より漆掻きが出稼ぎにきていた。

1957年(昭和32)には備中漆生産組合が結成され、当初は組合員20名ほどであったのが、1960年(昭和35)には他県からの加入者も含め、組合員数は100名にも及んだ。そして組合結成時、備中漆の生産量は855kgであったのに対し、3年後にはおよそ3.4倍の2,875kgを産出している。しかし、長崎国旗事件のダメージを回復すべく増産に力を注いだ結果、

大量に混ぜ物をした悪質な漆が出回る結果となってしまった。

備中漆は大阪の間屋に一手に納入されていたが、この混ぜ物が原因で信用をなくし、流通経路を絶たれてしまう。さらに1964年(昭和39)成羽ダムの建設によって漆の植栽地が水没し、以後は漆に関わる人間も土地を離れ、急速に衰退していった。

※備中に程近い鳥取県の佐治漆も良質の漆を産出することで知られ、岡山県真庭郡川上村の郷原漆器はこの漆を使用していたが、やはり時代の波に勝てず絶えてしまった^(注10)。

Ⅲ. 復興に向けて

戦後のこのような状況を憂い、国産漆の衰退を何とか食い止めようと、松田権六(漆芸家)、伊藤晴三(栽培研究者)が中心となって1972年(昭和47)、国内における漆の生産向上を目的とした日本文化財漆協会を設立し、これが1977年5月に選定保存技術「日本産漆生産・精製」の保持団体に認定される。

そして、日本の漆の復興はまず良質な国産漆の確保からという主旨のもと、国の補助の基に植林事業として岩手県浄法寺町内の営林局の国有林を借用し、1988年(平成1)約25ha、約3万本の試験林の植樹をおこなった。

この流れをくみ、1996年(平成8)1月、「日本うるし掻き技術保存会」が漆掻きの中心地である岩手県浄法寺の職人達によって結成され、同年5月に国の選定保存技術に追加認定された^(注11)。

●備中漆の復興

大規模な漆産地は東日本に多いが、かつては西日本にも吉野、伊勢などの代表的な漆産地が存在していた。しかしそれらは絶えてしまい、現在、西日本で漆掻きをしているのは備中(岡山)、丹波(京都)、阿波(徳島)のみである。

このわずかに残った漆掻きの文化を絶やさず、産業として後世に伝えることを目的とし、1999年(平成11)3月、この3地方の漆掻き職人の手により、

「西日本の漆を守る会」が結成された。

これに先立ち、1994年（平成6）社団法人林原共済会が岡山県郷土文化財団と共同で漆栽培や漆掻き技術の保存事業を始めた。現在、新見市に1600本、真庭郡川上村に200本の植栽が行われている^(注12)。

IV. 今後の課題

現代の漆業界が抱える問題は山積みであるが、産業の維持と今後の発展への課題として筆者は次の4点を提示したい。

- 1) 後継者の確保
- 2) 植林地の拡大と適切な管理
- 3) 国産漆樹の品種分類
- 4) 使用目的に応じた技術の開発

1) 後継者の確保

後継者問題はどの伝統産業のどの分野にも当てはまるが、漆掻き職人の存続は危機的状況に陥っている。

1985年（昭和60）には岩手県浄法寺町を中心として約90名、茨城県大子町に約20名、このほか新潟県朝日町、石川県門前町などに若干名、合計約140名の職人が漆掻きを行っていた^(注13)。16年後の2001年（平成13）現在、漆掻き職人は岩手県浄法寺町周辺で約20名、茨城、新潟でそれぞれ13～14名、その他の地域を含め、全国で50名にも満たなくなっている（岡山県は2名）。

現役の職人はかなり高齢化が進み、個人的な弟子入りも困難な状況であるため、保存会を機軸とした後継者育成が試みられている。

2) 植林地の拡大と適切な管理

漆の木は分根法か実生によって増やす。分根法は親の性質を受け継いだ安定した生育が期待でき、備中の植栽もこの方法による。一方実生は性質が安定しないが一度にたくさんの苗を造ることができる。浄法寺では実生による植栽が行われており、生育率

表1 平成10年度国産漆生産^(注21)

産地	生産量 (kg)
青森	30.0
岩手	1360.0
福島	37.9
茨城	720.0
栃木	86.0
新潟	103.0
石川	1.0
長野	1.8
京都	10.0
岡山	15.0
徳島	6.0
合計	2370.7

は7割程度であるという^(注14)。

ところで、普通漆の木が掻ける程度に成長するまでに10年かかる。1本の木からは約200gの漆液を採取でき、掻いた後は切り倒してしまう（殺し掻き）。切り倒さず翌年まで持ち越す「養生掻き」の方法もあるが、いずれにしても植栽は重要な作業である。

昔は樹齢を経た漆の木があり、一本の木から多くの漆液を採取することができたが、現在は限られた土地に年数が経たない若木が植えられているところが多いため、採取量に限界がある（表1）。

現在、ほとんどの漆は国有地で植栽管理されているが、漆は周知のとおりかぶれる性質を持っているため、過去に個人の土地で植栽されていたものが嫌がられて伐採されてしまったというのはよくある話である。

現在でも植栽の土地を確保するのは難しいという。しかし、ただでさえ手間のかかる漆掻きに、山中の漆を求めて巡るのは大変な労苦を必要とするため、まとまった区域に植栽することは、ひいては漆の生産向上と質の安定につながる。周辺住民の理解が求められるところである。

3) 国産漆樹の品種分類

ウルシ科の植物は主に熱帯を中心に自生し、その種類は60属600種もある^(注15)。しかし、塗りに使う漆液が採れるのは、この中の数種類に過ぎない。

日本に自生するものは、ウルシノキ、ヤマウルシ、ツタウルシ、ハゼノキ、ヌルデなどがあるが、漆塗りに使うものは「ウルシノキ」であり、中国西南部が原産の渡来植物ではないかといわれている^(注16)。

※沖縄では、南方系のアンナンウルシ・タイトウウルシを台湾から輸入して植栽した記録があるが、アンナンウルシについては現存する木は確認されていない^(注17)。

世界で漆文化を持つ地域は、日本をはじめ朝鮮半島、中国西南部のほか、チベットからブータン、ミャンマー、タイ、ベトナムにわたる一帯であるが、土地によって漆の性質は若干異なる（表2）。

例えば、タイやミャンマーでは竹を編んだ籠胎漆器が中心であるが、この土地で取れる弾力性の高い漆がこの素地とよくなじむ。日本産の漆では皮膜が硬いため、素地の弾力に合わないのである。

ところで、現在日本で使用される漆の98%は中国を始めとする輸入物で、国産は2%に過ぎない（表3）。

中国産は日本と同じ「ウルシノキ」から採取され、主に湖北省、四川省・陝西省、貴州省から出荷されるが、品質は日本産に比べて劣る。ベトナム産はフートー省を中心に採取される。透明度は高いが乾燥が遅いほか、ゴム質のため皮膜が弱く艶がない。タイ・ミャンマー産は艶がよいが乾燥は遅い。主に焼き付け用として輸入される。

表3 生漆の生産・輸入量（単位：kg）^(注21)

年 次	国 産 漆	輸 入 漆
1921（大正10）	54,000	1,002,000
1926（昭和1）	50,000	1,342,000
1931（昭和6）	38,000	1,342,000
1945（昭和20）	10,000	22,000
1946（昭和21）	8,000	0
1947（昭和22）	16,000	0
1948（昭和23）	16,000	60,000
1949（昭和24）	35,000	195,000
1950（昭和25）	25,000	169,000
1955（昭和30）	25,834	751,744
1960（昭和35）	20,001	242,665
1965（昭和40）	6,254	352,738
1975（昭和50）	5,214	509,939
1985（昭和60）	5,460	323,480
1995（平成7）	3,427	206,715
1996（平成8）	3,190	206,715
1997（平成9）	2,561	191,788
1998（平成10）	2,371	167,295

このように、アジアの各地域によって塗りに使われる漆の品種がいくつかあることはわかっていたが、日本に自生するウルシノキはただ1品種のみであると思われてきた。

ところが近年、産地ごとに性質が違う漆液が採れる事からウルシノキにも品種があるのではないかと考えられるようになり、研究が行われるようになった。

※備中漆の特徴

備中地方は石灰岩質の土地であり、土中の鉄分の

表2 生漆の組成例（%）^(注22)

生漆の種類	水分	主 成 分	含窒素	ゴム質
日 本 産	25.1	（ウルシオール） 67.3	2.1	5.5
中 国 産	27.5	（ウルシオール） 65.0	2.2	5.3
ベトナム産	32.5	（ラッコール） 52.5	2.0	13.0
ミャンマー産	26.8	（チチオール） 69.5	2.5	1.7

含有量が少ない。そのため、漆は体内酸化せず透明度が高い。

また、備中漆で採取される「油漆」について、山口松太氏（漆芸家・岡山県重要無形文化財）は次のように述べている。

「油漆とは、備中地方のみでの呼称のようである。この汁口のうるしは当地には普通であるが、他産地では余り見られない。油漆は初物漆の時からくろめた様な状態で底の乳白色の部分が少ない。乾きは遅いが、くろめると乾きがやや早くなる。汁口で透明度が良いので顔料と混和するのに都合が良く、また古くなって粘稠になったうるしに加えて、塗り易い軟らかさにするのに重宝である。最近の分析ではウルシオールが八六%以上もあり、液状での耐熱度も二五〇℃と他の国産漆にはない特徴をもっている。」^(注18)

この漆は非常に粘度が低く上層と下層に分離しやすい。乾燥は遅い。この地方独特の発色が美しい上質漆である。

＜産地別による質感の比較＞

- ・ 浄法寺…粘りがある
- ・ 茨 城…透明度が高い
- ・ 備 中…乾きが非常に遅い
透明度が高い
- ・ 阿 波…乾きが非常によい
肉持ちがよい
透明度が低い

- ・ 丹 波…乾き・透明度ともにほどよい^(注19)

備中の植林地において各地から集めた漆の苗木を栽培したところ、同じ条件下で栽培を行ったにもかかわらず、採取された漆液は産地ごとの違いをそのまま受け継いでいた。ただし昔から分根や実生によって全国に持ち運ばれ、植林されていることから、同じ品種が地理的に離れた位置で育成されている可能性もある。そこでDNA鑑定の結果、国内の漆が大きく3つのグループに分かれる傾向にあることが判明した^(注20)。これはウルシノキに環境の違いではなく品種の違いがあるという可能性を示すもの

として注目される。

この研究が病虫害や生育の環境に強く、良質かつ漆の出が良い品種の開発につながることを望まれる。

4) 使用目的に応じた技術の開発

科学技術の発達は、従来の伝統工芸従事者からは思いもつかないような漆の利用法を生み出した。

精製技法、支持体の下処理、添加物、塗装法等が最新の技術でさまざまに試験され、その結果はいわゆる工芸品のみならず家具や建築、苦手とされた金属への塗装など、次々と新しい技術を打ち出している。引き続き今後の成果が期待される。

V. おわりに

—生産者・制作者・消費者の連携の必要性—

これまでを見ると、植林地と漆掻き職人の減少、慢性的な産業不振によって、日本の漆はほとんど生産されていないのではないかと恐れがちである。

ところが驚くべきことに、現実には国産の漆が買い取られずに生産地でだぶついたままになっている。

これは何を意味するのだろうか。

最大の問題は価格である。

店頭に並んだとき、日本産の漆は外国産の実に10倍の値がついてしまうのである。

国産の品質と植栽から始まって採取、精製、出荷にかかるコストとを考えればこの価格は妥当ではあるのだが、使う側にしてみれば、多少品質が劣っても安い輸入漆に傾いてしまいがちである。下地に輸入漆を使い、上塗りに国産漆を使うのはまだ良心的だが、コストを抑えるために合成塗料に漆を混ぜて「漆塗り」と称する事も認められているので、なかなか国産漆には手が伸びないのも致し方ないのである。浄法寺や茨城のような大量生産地はともかく、備中のような小さい産地は販売ルートを確保することが難しい。現段階では「産地」というより、「備

中漆を絶やさず伝承する」というのが実状であり、前述のように植栽や研究を行ったり他産地との交流を図ったりしながら復興に向けて活動を続けている。

漆の業界において、生産側の根である漆掻きと制作者との関わりは希薄であった。制作者は材料店に行けば漆が買え、外国産に対しても何の疑問も持たない者が多い。しかし、生産側はたとえ採取量が増えてもそれが売れなければ何の意味も無いのである。国産漆を使う意味は何か。ただ掻いて売るだけではそれはわからない。生産者、制作者、消費者の連携が取れてこそ、自己満足に終わらない本当の発展の道が開けるのである。

〈注〉

- 1) 大西長利監修「アジアのうるし・日本の漆」フジタヴァンテ編 東京美術 1996 p 26
- 2) 大西長利 前掲書 pp. 98~99
- 3) 漆の館「JAPAN No 4」西日本の漆を守る会 2000 p 8
- 4) 大西長利 前掲書 p103
- 5) 佐々木英「漆芸の伝統技法」理工学社 1986 p I-2
- 6) 佐々木英 前掲書 p I-3
- 7) 新見美術館 「備中新見庄解説」2001
- 8) 漆の館「JAPAN No 9」西日本の漆を守る会 2001 pp. 5~6
- 9) 丹下民雄「備中漆」林原共済会1999 p 101~103
- 10) 丹下民雄 前掲書 p103
- 11) 柳橋 眞「漆芸-伝統工芸」日本の美術 第304号 p 76 1991
- 12) 漆の館「備中漆の復興」林原共済会 2001 p

2

- 13) 柳橋 眞 前掲書 p 19
- 14) 漆の館「JAPAN No 8」西日本の漆を守る会 2001 p 5
- 15) 佐々木英「漆芸の伝統技法」理工学社1986 p I-1
- 16) 大西長利 前掲書 p 26
- 17) 漆の館「JAPAN No 6」西日本の漆を守る会 2000 pp. 1~6
- 18) 丹下民雄 前掲書 p110
- 19) 漆の館「JAPAN No 4」西日本の漆を守る会 2000 p 2
- 20) 漆の館「JAPAN No 9」西日本の漆を守る会 2001 p 1~2
- 21) 日本の玩具と工芸品「漆掻き—国内漆データ」
<http://www.ops.dtime.jp/~cn21/hp/contents99/urushi/index.html>より転用
- 22) 漆を科学する会「うるしって?—産地による成分の違い」<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/urushi/urushite/urushite.html>より転用

〈参考文献〉

- ・大西長利監修「アジアのうるし・日本の漆」フジタヴァンテ編 東京美術 1996
- ・灰野昭郎「漆 その工芸に魅せられた人たち」講談社 2001
- ・丹下民雄「備中漆」林原共済会 1999
- ・柳橋眞「漆芸—伝統工芸」日本の美術 第304号 至文堂 1991
- 漆の館「JAPAN No 1~9」西日本の漆を守る会 1999~2001